

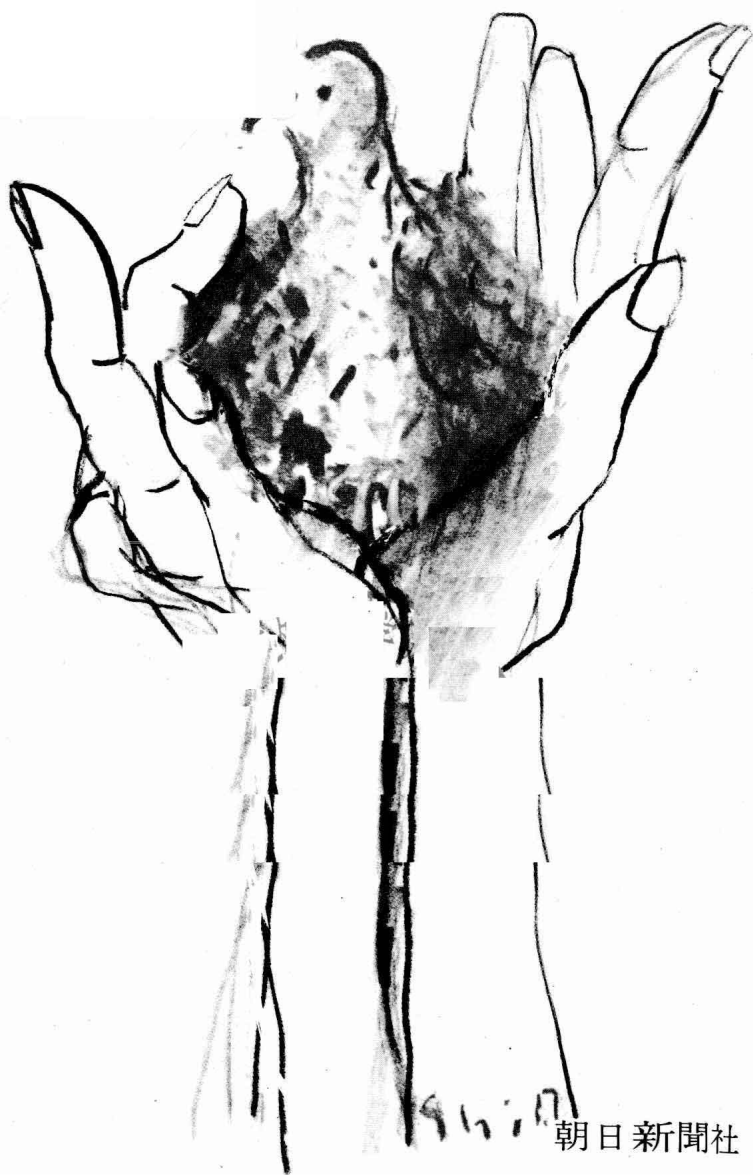
高田克子

かあちゃん
行かないで！



かあちゃん 行かないで！

高田克子



朝日新聞社

かあちゃん 行かないで！

定価 380 円

発 行 昭和41年12月15日 第1刷

著 者 高 田 克 子

発行者 朝日新聞社 足田輝一

印刷者 内外印刷株式会社

発行所 東京 名古屋 朝日新聞社
大阪 北九州

目

次

不幸のはじまり

6

バタヤをはじめた父

15

えんそくの日のこと

25

かあちゃん、どこにいるの

32

父のけが

47

しせつの生活

60

四恩学園

76

私はだっそう兵

96

ピエロになりたい 116

思い出のワンピース 139

おかあちゃんがいた！ 164

父の呼ぶ声 190

シヨンベン長屋 210

小さな骨 233

少女詩人克ちゃん

——あとがきに代えて——

松原忍 253

装本 片岡眞太郎

かあちゃん、
行かないで！

不幸のはじまり

あの出来ごとは、私たち一家がいりん寮に住んでいたときで、私が三年の三学期の末ごろ、けびょうをつかい、ほんとうの病氣にかかってしまったときのことである。

そのとき母は、病氣がかいふくしていないからだで、私をかんびょうしてくれた。

そのあくる日の夕方、父が酒によったからだで、あり金を使って、たいやかまぼこやら、上等のおかずをかってきた。あのお金を使うとこまってしまう。父もそのころ、働かずにはぶらぶらのみ歩いていたから。

そのとき家では米がなくなり、あり金で米を買おうと思っていたのに、父がつかってしまっ

たのだ。母が

「おとうちゃん、またのんできたんやろ。そんであのお金、ぜんぶつこ(使)たんちがうやろな」

「うるさい」

と父がどなる。私は

「おとうちゃん、なんであのお金つこてんや。あのお金つこたら、お米かわれへんやんか。そんないより、お米の方がだいじやで。そんなもんかうお金があつたら、お米こうてる方がもつとまじやのに」

という

「お前はだまっとれ。おとうちゃんがせっかくたいこ(買)うてきたのに、うるさいなあ」

私はいつもよりもはらがたった。金も米もないというのに、父はぜいたくな物ばかりかっけてきている。母がまた

「おとうちゃん、なんでそんな物こうてきたんや。お米もないのに、あほやなあ」

私もつづいて

「そらそうやんか。おとうちゃん、ろくなもんこうてきよれへん」

父は、いきなり、たいを母の顔になげつけた。たべものをぜんぶたたきつけるのだ。

「なにもそんなことせんかてええのに、このきちがいめ。死ね、あほ」

私は心の中でさげんだ。それでもみんなで食事をすませ、そこにはいった。

夜中になって、母のねている所がさわがしいので、ねむたい目をこすりながら起きてみたが、電気がついていないので、なにがなにやらわけがわからず、すわっていると、母が「克子、おきとらんと、早よねときなさい」といわれたので、そのままねむってしまった。

朝起きると、なにもおかずがない朝食をすませた。昼もすぎ、晩がやってきた。晩ごはんがすんだとき、上谷のおっちゃん^{かみだに}が遊びにきた。

上谷のおっちゃんというのは、「裸の会」*にはいつている人で、父も母も「裸の会」にはいつてから知りあった人だ。父とは大の仲よしだ。上谷のおっちゃんも、父とおなじようにお酒がすきで、お酒をのんでようと、泣きだすくせがある。いつだったか、父とおっちゃんがお酒をのんでいたとき、おっちゃんはいつものくせが出て、

「別れたにようばや、子供が恋しい」

といって泣いた。おっちゃんの話では、おっちゃんも、いぜんは父と同じように、アルコール中毒になり、精神病院に入れられたが、入院している間に、奥さんと子供がどこかへ行ってしまうて、いまだに行方がわからないそうさ。病院へはいるまでは、学校のかん視員をしていた

が、退院してからは、かん視員をやめて、アンコをして働いているとのことだ。父は、母と上谷のおっちゃんの間があやしいといって、上谷のおっちゃんといひ合っていた。おとなの世界って、なんてふくざつなんでしょう。

父と上谷のおっちゃんが話しおわって、おっちゃんがかえるちよつと前、また父と母のけんかがはじまり、こんどは父が

「トキエ、出て行け。お前が出て行けへんかったら、わしが子供をつれて出て行く」というのだ。すると母が

「克子つれていったら、とちゅうで死んでしまう」

といいながらオーバーを着て、さつと外へ出て行こうとするから、私は弟の康生やすおとふたりで

「おかあちゃん、おかあちゃん、どこへ行くの」

ときいても、母はさつさとかいだんをおりて行ってしまった。私は、母はきつとかえってくると思っていたので、康生やすおに

「やす、心配せんでもええで。おかあちゃん、ぜったいにかえってくるからな」というと

「うん」

と、弟はうなずいた。

だが、いくらまっても、母はかえってこない。私たちは

「おかあちゃん、おかあちゃん、はよかえってきて」

と、なんどもなんども泣いた。そのうちに弟はごろねをしてしまった。私は、いくらなくても、母はかえってこないことを知りながらも、なみだが出るのだ。

「おかあちゃん。ううう、えーん、おかあちゃん」

私はなきさけんだ。母はどこにいるの、どこにいるのだろう。私はなきさけなかった。夜があけても、母はかえってこない。もう母にはあえないのだろうか。

うちのおやじとなるべくつきあうな

うちのおやじは きちがいですから

なるべく つきあわないで ください

うちのおやじは ねしょんべんを20かいぐらいたれて

うんこを15かいぐらいたれたこともあります

おさけをのまなかったら

ねこみたいにしゃべりません

だからつきあったって

おもしろくないよ

それにあほみたいです

だから だれでもいいですから

せいしんびょういんに

にゅういんさせてやってください

私は、『裸』^{*}というざっしに、こんな詩をかいたことがあったが、今となつては、私たちきょうだいにとつて、たよりになるのは、父だけなのだ。

だがよく考えてみると、私たちの家庭がごたごたしはじめたのは、もっともっと前からで、私にはよくわからないが、なにか大きな原因があるようだ。

私たち親子が楽しくくらせたのは、あいりん寮にはいるまでであった。きたなくてせまいバラックから、新しく建ったばかりのあいりん寮にはいったときは、新しいたたみのおいがぶんぶんしていて、とてもうれしかったが、酒ずきな父は、だんだんと酒をたくさん飲むようになり、会社を休んでは、朝から酒をのんでいた。父はアルコール中毒になっていったようだ。だから酒をのむと、気持ちがいたい、母や私にどなりちらすのだ。

父が会社を休むので、生活が苦しくなり、お米を買えない日がなんどもあった。それで母は仕事に行くことになった。私や弟にとっては、母は家にいてほしかったが、私たちのくらしのことを考えると、しかたがなかったのだ。

防犯相談コーナーの松原のおっちゃんのせいで、母は、今宮診りょう所へつとめるようになった。母がつとめるようになると、父はますますいい気になって会社を休み、朝から酒をのんで、ふらふらして歩いた。

母はいろいろな考えたけっか、ある日父をつれて、松原のおっちゃんの所へ相談に行った。父を入院させるためだ。相談のけっか、アルコール中毒をなおすには、精神病院へ入院しないとなおらないということで、父はすぐその日のうちに精神病院へ入院した。ふつうの病院に入院しても、病院をぬけ出してお酒をのむからなおらないのだそうだ。

私はその晩、母から、父が精神病院へ入院したことを聞いて、なぜ克子に一目あってから行ってくれなかったんだろうとさみしい気もちがしたが、でも、これで父のアルコール中毒がなおるなら、うれしいと思った。

夜になると、父がいなくなったことがさみしくて、なんだかもの足りない感じがした。酒のんではどなりちらし、あれほど母や私たちを悩ましつづけた父なのに、やっぱり父がいないとさみしい。血のつながった親と子なのだから、あたり前のことだと思った。

父が入院して、しばらくしてから、上谷のおっちゃんが、私の家へ遊びにくるようになった。私たちの不幸は、そのじぶんからはじまっていたようだ。

上谷のおっちゃんは、くるとき、いつも私たちにおかしを買ってくれたりして、私たちをかわいがってくれた。

何カ月かたって、その年のおわりごろ、父が退院してきた。父は前とは変って血色のよい顔をして、さも健康そうで、見違えるようになっていた。私はうれしくなり、父に

「おとうちゃん、もうお酒のまんとときや」というと

「ああ、おとうちゃん、もうぜったいにお酒のまへんさかいになあ。酒見たらこわいわ」

といった。私はうれしかった。

「やっぱり入院してよかった」

と思った。父は退院してからは、一てきのお酒ものまなかった。そんな日がしばらくつづいた。ところがある日、とつ然母が入院した。私は母がなぜ入院したのかわからなかった。どうやらおなかの病氣らしかった。私は心ばいだった。せっかく父が元氣になって退院してきたというのに、また母が入院とは、こまったことだなあ、と思った。でも母は、一週間ほどして退院してきたので、私はやれやれと安心した。

だがどういうわけなのでしょう。そのころから父が、やめていたお酒をまたのみはじめたのです。そしてお酒をのむと、母にどなり散らすし、上谷のおっちゃんとも口げんかをするようになった。そして、こんどはどうとう母が、病氣のまだかんぜんにかい復していないから家で、家をとび出してしまったのだ。

* 「裸の会」 昭和三十六年の釜ヶ崎暴動事件の直後、いろいろな文学活動を通じて精神の向上をはかり、明るい町づくりに寄与しようとの意図で、釜ヶ崎居住者が結成した会。『裸』はその機関誌——編集者注